国際交流体験記（平成 25 年度）

教育学部国際交流委員会では、本学学生のグローバル化を推進する事業として、さまざまな事業を実施しています。平成 25 年度は日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（短期派遣）に応募し、「アジアアメリカ異文化交流プログラム」が採択されました。このプログラムは、学生の双方向交流の促進のため、日本の大学等が実施する３か月未満の留学生受入れ、または３か月未満の学生派遣のプログラムに参加する学生を対象とした奨学金制度です。参加の学生には派遣地にあわせて１ヶ月あたり７万円～8 万円の奨学金が支給されました。また、香川大学国際交流基金に応募し、学生に関する交流は「交流協定校短期訪問援助事業」と,「本学学生の外国における学会発表・調査研究援助事業」の２つが採択され、ニュージーランドのクライストチャーチ工科大学と、アメリカのコロラド州立大学に短期訪問しました。教育学部後援会からは、語学研修等にいく学生に対して一人あたり３万円の補助を行っています。この事業を活用した学生が、初めて南ボヘミア大学を表敬訪問し、南ボヘミアのトジェボニ（トレボン）にある職業訓練高校でインターンシップ事業を行いました。平成２５年度、学生に対して交流協定校や学生個人に助成が行われた事業の実績は以下の通りです。

第３回国際交流講演会にて
セントメリー大学化学科教授　Dr. Jason Clyburne

コロラド州立大学学生来日
附属高松小学校でのふれあい活動

- チェンマイ大学異文化交流プログラム
  ３月　チェンマイ大学（タイ）へ訪問；半澤伊吹、冨田修人、裏山はなえ
- コロラド州立大学異文化交流プログラム
  ９月　コロラド州立大学（アメリカ）へ訪問；楠木美香、堀家利沙、宮武摩耶、大西弘訓、安井雅紀
- 交流協定校への短期訪問
  ３月　クライストチャーチポリテクニック工科大学（ニュージーランド）へ訪問；宇野満里加、佐野　千尋、長尾一慧、堀家　利沙
- インターンシップ事業
  3 月　南ボヘミア大学（チェコ）；名越絹子
- 語学研修
  西オーストラリア大学（オーストラリア）；大邱大学（韓国）；チェンマイ大学（タイ）；

また、受け入れ事業では 5 月 27 日（月）～6 月 28 日（金）までコロラド州立大学の学生８名と教員１名、11 月 25 日（月）には、台湾嘉義大学から学生８名と教員 5 名、10 月２５日（金）ブルネイ・ダルサラーム大学他学生２名が、香川大学教育学部および、附属学校園で活動を行いました。また、教育学部および１月国際交流講演会年３回実施しました。

参加学生の感想や、会の実施報告は以下の通りです。

CMU-SGU-KU 2014

今回のプログラムに参加してよかったと心の底から思う。今まで海外にすごく興味があった私にとって今回のプログラムはたくさんの刺激を得られた。自分のちっぽけさに気づけた。チェンマイ大学の学生とのコミュニケーションは主に英語でやり取りする。英語すらもままならない私は英語を使うときに自信がなくおどおどしてしまうけど、チェンマイの学生も札幌学院大学の学生もそんな素振りは一つもなかった。話せるか話せないかは別問題で、どんどん話しかけていく姿勢が私にはないものだった。また、言葉は完璧でなくても伝えることは可能で、言葉だけがコミュニケーションツールではないということを今回学んだ。話さなくても表情や身振り手振りで感情を伝えることはできる。これも欠かせない１つのコミュニケーションツールであると思った。もっともっと積極的に外へ出ていかなければならないと思った。これに気づけたことはこれからの残りの大学生活に大きな影響を及ぼすと思う。今回のプログラムで、待っているだけでは何も始まらないこと、自分から積極的にチャレンジしていかなければならないこと、この必要性を学んだ。

チェンマイ市内の小学校でのふれあい活動

タイの人のおもてなしの心に私は感銘を受けた。日本人よりもおもてなしの心があるのではないかと思うほどだった。タイ、チェンマイを余すことなく紹介してくれた。英語もタイ語もままならない私をいつもにこにこ笑顔で受け入れてくれて、たくさんの思い出をくれた。この経験は一生忘れないだろう。物価の差が大きくて簡単には行けないけど日本に行ってみたいということもたくさん言ってもらえて嬉しかったし、彼らが来たときは私が今回のようにおもてなししたいと思った。

チェンマイでの思い出は楽しかったことしかなく一生の宝物となった。またチェンマイ大学の学生に会いに行きたい。日本にも来てもらいたい。短い間だったけれど濃い２週間だった。（裏山はなえ）

クライストチャーチ短期訪問活動報告

まず、クライストチャーチ市を襲った地震の復興について述べる。市内は、まだあちこちで工事が行われており、至る所に壊れた建物や山肌が崩れてこないようにコンテナが置かれていた。また、仮店舗としてコンテナが使われており、コンテナショップとなっていた。地震の後は多くの企業が倒壊し、その跡地は駐車場になったため、市内に駐車場が増えたそうである。

牧場での体験活動

日本人留学生の方が多く犠牲になられた CTV ビルは更地になっており、被害の状況を書いた看板が立てられていた。さらに、CPIT や市内にも白く塗られた椅子やモニュメントなどが数多く存在した。紙の大聖堂や Quake City にもつれて行っていただき、日本人の方との関係やニュージーランドの地震の歴史、地震の被害の状況、ニュージーランドの地層についてなど知ることができた。

次に、マオリ文化について述べる。CPIT にある TE PUNA WANAKA やカンタベリー博物館でマオリの文化や像にこめられた意味、マオリ語などを学んだ。マオリのことは、殆ど知らなかったがマオリの人たちがモアという大きな飛べない鳥を乱獲したために、白人の人が来た時にはモアは絶滅していたという話や Flax という植物でカーペットやバックのようなものを編んでいたということなどを知った。また一つ一つの像に意味があることも初めて知った。さらに、キョーラ（こんにちは)、カーキッテ（さようなら)、カーパイ（いいね、ありがとう）など簡単なマオリ語も教えていただき、とてもいい勉強になった。

最後に英語について述べる。英語は苦手であったが、ホームステイ先ではずっと英語で話さなければならなかったので、リスニング力やスピーキング力が少しはついたと思う。ニュージーランドの方は私の英語が拙くても理解しようとしてくれたし、ゆっくり話したりジェスチャーをつけたりしてくれてとても優しかった。さらに、バスに乗って通学しなければならなかったので運転手さんとの会話など何を聞かれているのかが分からなくて苦労もあったが、それもまた勉強になったと考える。CPIT で日本語を学習している学生さんと交流する機会もあり、日本語と英語を交えながらクライストチャーチや香川のことについてお話することができた。　　（長尾一慧）

コロラド州立大学 ECC での活動報告

コロラド州立大学 Masako Beecken 講師、Lise Youngblade 教授のもとで、幼児・児童を対象にした環境に配慮した教材開発について共同調査研究を実施した。また、コロラド州立大学プレスクール（Early Childhood Center: ECC）および地元の Dunn 小学校で教材の活用方法に関する調査研究を実施した成果について報告する。

コロラド州立大調査
Dunn 小学校でのふれあい活動

コロラド州立大学で、夢化学２１in Kagawa で実施しているプニプニボール（Puddy-Gummy Balls）を作成することにした。プニプニボールは、人工イクラの作り方と同じで、アルギン酸ナトリウムは食用として市販されており、実際に食べても大丈夫であり、体に悪影響になることはない。大学では、夢化学２１in Kagawa という行事で日本の子どもたちにもプニプニボールを作ってもらい、楽しんでもらっている。子どもたちには、いつも好評である。

まず ECC を訪問し、教職員を対象にプニプニボールの演示実験を行い、説明を行った。実演を見た担任

の先生方は、なぜプニプニボールができるのか不思議な様子だった。プニプニボールは、人工イクラと作り方が同じであり、口に入れても安全であることを伝えると、子どもたちにも安全であることを分かってもらうことが出来た。先生方には、プニプニボールに非常に興味を持ってもらえ、子どもたちの前でもぜひやってもらいたいといってもらえた。そして、子どもたちの前でもプニプニボール実演を行った。２クラス、計３０人の子どもたちに、プニプニボールを作り、遊んでもらった。また、Masako Beecken 講師との協議の結果、Dunn 小学校に訪問し、同様の活動を行うことが決まった。Dunn 小学校では、４クラス、計１００人の子どもたちにプニプニボールを作ってもらった。また、自然環境学科で Ionic liquid for application of Science fair というタイトルでポスター発表を行い、意見交換もできた。この短期訪問で実施したこれらの活動を修論研究に生かしたいと考えている。(安井雅紀)